



Fig. 1. *Grammitis nipponica* Tagawa et K. Iwatsuki, on sandy rock, under the sparse crown of *Celtis sinensis* v. *japonica* and *Camellia japonica*, by Fudô Fall, Kata, Suzuka-gun, Mie Prefecture. The leftmost frond broken at the upper portion bears sori. Sept. 6, 1969. Photo K. Mango.

チャボシラガゴケ、オオムチゴケ、ノコギリフタエウロコゴケ等の 蘚苔類が周辺に散生していた。溪谷の岩の間が比較的風当りが弱く暖かい場所のため、南方系の本種が冬期枯葉しないで越冬可能かと思われる。分布について御教示賜わった 瀬戸剛先生に深謝致します。

(三重県立上野高校 菊山文秀)

○シャクナゲとツツジの呼び方について (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: On Japanese vernacular names of *Rhododendron*, 'Shakunage and Tsutsuzi'

最近、東京山草会から「シャクナゲとツツジ」という本が出版された。その中で新しい主張がなされている。従来から呼ばれていたヒカゲツツジ、サカイツツジ、ゲンカイツツジ、エゾムラサキツツジを ツツジの類とするのは誤りで、シャクナゲの仲間で

あるとして、ヒカゲシャクナゲ、サカイシャクナゲというふうに改名したのである。変更を主張するだけなら、全然理由のないことでもないのの一つの立場として理解されるが、従来のあつかいが、研究不足による誤りであるといった議論を本気でのべているのは、いささか行過の感がしないでもない。この本が一般むけの解説書としてかかれており、かなり普及するであろうことを考えると、ツツジ属の不十分な理解から発している、この主張の当否を、はっきりさせておくことも必要なことと思う。

問題は日本でシャクナゲ類と呼ぶものの範囲と、ヨーロッパやアメリカでシャクナゲ類としてあつかうものの範囲とが異っていることからきている。どちらがうのかその点をまずはっきりさせておこう。ツツジ属には多くの亜属がある。日本の野生種は次のように分類される。

Subg. *Rhodorastrum* C.B. Clarke ゲンカイツツジ、エゾムラサキ、サカイツツジ。

Subg. *Anthodendron* Rehder サクラツツジ、シロヤシオツツジ、ミツバツツジ類、ヤマツツジ類。

Subg. *Azaleastrum* Planchon バイカツツジ。

Subg. *Eurhododendron* Koehne シャクナゲ類。

Subg. *Pseudanthodendron* Sleumer ムラサキヤシオツツジ、アカヤシオツツジ、オオバツツジ、レンゲツツジ。

Subg. *Lepidorrhodium* ヒカゲツツジ。

東京山草会では、シャクナゲの名で呼ぶべきものは、狭義のシャクナゲ類の他に、茎や葉に腺状毛¹⁾をもつものも入れるべきだという主張をしている。¹⁾上のうちでこれにあたるものはゲンカイツツジ亜属とヒカゲツツジ亜属である。この2つの亜属は系統的にはシャクナゲ亜属とかなり異なるが、常緑であって、外見はシャクナゲ亜属とよく似ていることから、ヨーロッパやアメリカの園芸界では便宜上この3亜属をシャクナゲ類としてあつかっているのである。

日本ではシャクナゲの名で呼んでいるのはシャクナゲ亜属にかぎられている。これは古くから日本人が身近にあるシャクナゲを正確に認識していて、同じ常緑のものでサクラツツジやヒカゲツツジはシャクナゲ類とみなさなかつたためと思われる。

日本でもこの3亜属を、外国の習慣にならってシャクナゲ類としてあつかうことは、便宜上当然なことであろう。しかし日本で昔から知られていた上記の正確な認識を忘れて、シャクナゲ亜属以外の2亜属のものも、シャクナゲと呼ばなければ間違だと主

¹⁾ 東京山草会ではこれを鱗片とよんでいるが、鱗片という言葉はいろいろなものに使われる言葉である。一般にはシダ類の葉柄にある薄皮状のものや、冬葉を包む鱗片葉などに鱗片という言葉がよく使われている。ツツジ属の場合は毛に類する性質のもので、鱗片の言葉を使うのは誤解を起しやすく適当とはいえない。腺状毛又は腺状鱗とよぶのがよいであろう。

張するのでは、便宜上行なわれていることが実体をゆがめることになり、本末転倒ということになる。

この本はツツジ、シャクナゲが好きで栽培している人達が協力して書いたものなので、栽培にかんしては貴重ながことが述べられている。しかし一般の人への影響が大きいので、充分勉強した上で慎重な発表をしていただきたい。この本のツツジ類の解説の中には他人の長年にわたる研究をそのままのせて、資料を提供した研究者のことは殆んどふれていないものもあると聞いている。こうした研究に対する安易な態度が、不十分な理解で大胆なことを言うことにもつながっているのではないかと思う。よく売れる本で、いつれ再版されることになると思うが、そのさいには和名の無用な混乱をさけるためにもぜひ改ためていただきたいものである。

(東京大学理学部 植物学教室)

□正宗敬敬：日本の植物 第 8 巻，295 頁，カラー 207 白黒，図 318，5，10，1969 高陽書院 価 3.500. 本書は「日本の植物」刊行会の代表正宗氏が、代表刊行者となっているけれども、タイトルページに著者の名がないが、正宗氏が著者であり、また刊行者代表であることは、まえがきや凡例から見て明白である。かゝる堂々たる刊行物には著者名を明記しないと、引照上からも整理上からも不便である。ことにこの本が海外人の手に渡った場合めいわくするにちがいない。それはともかく、まことに立派な出来ばえで、また著者独自の立場での撰択が行われていて、また坊間に行はれているいろいろな図鑑にもとめ得られないものが図説してあるのは結構である。本巻は単子葉類(Ⅱ)でビャクブ科，サクライソウ科，ユリ科，ヒガンバナ科，ヤマモ科，アヤメ科，バシヨウ科，シヨウガ科，ヒナノシャクジョウ科，ヤクシマラン科，ラン科が収められている。なお、利用者の立場からすれば、各図に通巻番号をいれてもらいたかった。終りに続巻の編集刊行が順調にすゝみ、完結の日の速かならんことを期待してやまない。

(久内清孝)

□倉田 悟：植物と民俗 A5，328 頁，索引 23 頁，口絵写真 12，15，10，1969，地球出版，1.200 円。植物と民俗，植物の方言名（奥武蔵，相模，周防，薩摩），草木を訪ねて，シダの在り処，植物方言集（熊本営林局管内，伊豆天城北麓，越中黒部，五箇庄）などの 5 項にわかれていて、内容見本のなかで著者は「人は旅人—私も草深い山里に民俗を訪ねるひとりの旅人にすぎない」と著者の言葉としてのべられていられるが、一読するとまことにその感がある。森林利用学者としての専門の仕事のかたわら筆をとられたもので、その点で長い間の蓄積であるから、燈火の下で心ゆくまで読まれる一書である。もし著者既刊の日本主要樹木名方言集や、続樹木と方言とともに本邦植物の方言を知ることになれば、その点で植物方言の集録ともいえる。また索引がととのっているので、方言を引き出すのに都合がよい。

(久内清孝)